

神奈川

2020年東京五輪・パラリンピックで宿泊施設の不足に対応するため、大型クルーズ船をホテルとして利用する「ホテルシップ」構想が動き出した。豪華客船の長期停泊が実現すれば、国際的な知名度の向上が期待できるとあって、客船埠頭が完備している横浜、東京両港をはじめ、川崎港や木更津港(千葉県)なども誘致に乗り出している。

みずほ総合研究所の試算(2017年1月)によると、東京都内では新規ホテルの開業により東京五輪時の客室不足は大幅に緩和される見通しだが、2020年に訪日外国人旅行者が4千万人に達した場合、最大で1万5千室不足するという。そこで、政府が窮余の策として持ち出したのが、クルーズ船を東京都内外に長期停泊させるホテルシップ構想だ。

2017年6月には関係省庁、港湾を管理する自治体、クルーズ船社などを集めて第1回検討会議を開催。旅館業法の営業許可、入管難民法上の外国人乗組員の扱い、食事を提供する際の関税法の位置付けなどについて、現行法の枠内で対応できることを確認した。今後、横浜市、東京都などと問題点を詰め、使用可能な埠頭を決定する。

国土交通省によると、海外の五輪でのホテルシップは、2010年バンクーバー(カナダ)と2012年ロンドン(英国)で各3隻、2014年ソチ(ロシア)で4隻、2016年リオデジャネイロ(ブラジル)で2隻の導入実績がある。日本でも、1964年の東京五輪期間中、横浜港大さん橋に5隻が同時着岸し、延べ約3,500人が宿泊した記録が残っている。

横浜港では、1989年の横浜博覧会の際も英国船籍の「クイーンエリザベス2」(QE2、約7万トン、2008年引退)を2ヵ月余り係留し、宿泊、飲食、パーティー会場などとして利用。この間、延べ約18万人が乗船して、つかの間の「豪華客船の旅」を味わった。ホテルシップに関して、横浜港は一日の長があるといえる。

数ヵ月にわたる船旅を想定して建造されたクルーズ船は元来、陸上のホテルに勝るとも劣らない宿泊・飲食機能を保有。10万トンを超す外国の超大型船ともなると、ブランド品を集めたショッピングアーケードのほか、シアター、プール、フィットネスジム、パターゴルフコースなどの娯楽施設を備え、まさに“洋上都市”の様相を呈する。



改修前には2度にわたって「ホテルシップ」を受け入れたことがある横浜港大さん橋(停泊しているのは「スーパースターヴァーゴ」) 2017年7月

東京五輪で「ホテルシップ」実現へ

豪華客船の長期停泊が実現すれば、国内外のクルーズ船社から寄港地に選ばれ、多大な経済効果が持続することも期待できる。また、港湾都市として国際的な知名度が向上し、東京五輪終了後もMICE(国際会議や展示会の総称)の誘致などで有利になることが予想される。このため、現在は貨物専用岸壁しかない港湾もホテルシップの誘致に参戦。

川崎港を管理する川崎市は五輪開催期間中の約1ヵ月間、東扇島(同市川崎区)の岸壁をホテルシップの停泊地とする方向で、関係者と調整を始めた。羽田空港や都心に近い立地を生かし、将来的にはクルーズ港としての可能性も探るといふ。木更津港を抱える木更津市は、地方創生の切り札として「東京湾の新たなクルーズ拠点」の整備を目指している。

5万トン級(乗客定員1,000人前後)以上の大型クルーズ船が停泊可能な埠頭は、横浜港に6ヵ所、東京港に3ヵ所あるが、貨物主体の所が多く、常時使用できるわけではない。ホテルシップの停泊地の選定は、東京湾全体のクルーズ拠点の在り方を踏まえた上で、長期的な視点に立って行われるべきであろう。